S.　Ashina

＊自然神学の社会科学への拡張

後期オリエンテーション

１．自然神学とその歴史的展開

１－１：自然神学とは何か　１－２：自然神学とキリスト教思想（弁証と論争）の形成

１－３：自然神学と自然学・自然科学　10/27

１－４：自然神学の古典的な諸問題　11/10

１－５：自然神学の拡張と聖書　11/17

２．自然神学の拡張と科学論

２－１：聖書の社会教説　11/27

２－２：聖書の経済・環境思想　12/1

２－３：聖書の政治思想　12/8

２－４：自然神学から社会科学へ　12/22

２－５：キリスト教思想と科学技術　1/5

２－６：キリスト教思想と生命　1/12

２－７： キリスト教思想と脳科学　1/19

フィードバック

＜前回＞自然神学とは何か

（１）辞書的な理解のレベルで（自然神学に関する一般的な定義）

１．Natural Theology（*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.）

２．「自然神学」（『宗教学事典』丸善出版、2010 年 10 月）

自然神学は、キリスト教思想における伝統的なテーマであり、古代から現代にいたるまで多岐にわたる研究がなされてきた。まず、基本的なことがらから議論を始めることにしよう。神認識との関わりにおいて、自然神学は、通常啓示神学と対をなすものとして理解されてきた。つまり、啓示神学が、神の啓示の書物である「聖書」を通した神認識であるのに対して、自然神学については神の被造物（作品）としての「自然」を通した、あるいは人間の自然の理性的能力による神認識と一般的に説明されてきた。聖書と自然を神認識のための書物とする「二つの書物」説は、その典型であり、また宇宙論的神の存在論証（神の存在と属性を論理的に示す）は、自然神学の代表的な議論とされる。

・ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との対立という歴史的状況を背景に、とくに、プロテスタント的立場のキリスト教思想家によって否定的な評価がなされてきた。

・1930 年代の有名なバルトとブルンナーの「自然神学論争」

３．Anthony Kerry, *What is Faith ? Essays in the Philosophy of Religion*, Oxford University Press, 1992.

Natural Theology, it is sometimes said, is neither natural nor theology. It is not theology, but philosophy , it is the philosophical study of questions concerning the existence and nature of God.　(63)

４．聖書的前提：創造論／知恵思想

５．パウロ：Rom 1:19-20

（２）キリスト教神学の自然神学の源泉

６．自然神学は古代ギリシャ哲学起源である　→　キリスト教・教父

・自然神学とは本来哲学の一部門である。

＜プラトンの自然神学＞（『法律』第10巻、『プラトン全集　13』岩波書店）

＜ロゴス論＞

・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

「もっとも学識すぐれた祭司長スカェウォラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」（服部英次郎訳・岩波文庫『神の国（一）』329頁）

７．波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』（『波多野精一全集　第三巻』）の目次

８．田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004年。

１．自然神学とその歴史的展開

１ ― ２ ： 自然神学と キリスト教思想（弁証と論争）の形成

（１）キリスト教的自然神学の起源と意義―４世紀カッパドキアの教父たち―

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press　1993

, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press　1997

１．キリスト教自然神学の原点としての４世紀：ヘレニズムとの出会い

the perennial issue of the Christian encounter with Hellenism, because that has been the historical matrix for the very idea of "natural theology."

the encounter and the synthesis were embodied in the thought of the so-called Three Cappadocians, Gregory of Nazianzus, Basil of Caesarea, and Greory of Nyssa, and of "the Fourth Cappadocian," Macrine, sister of the last two.　（1993,.ix）

２．キリスト教思想史における決定的位置づけ：基本的枠組み

Because of the place of these fundamental assumptions in the dogma of the fourth century and in the dogmatic theology of the Cappadocians, they assumed a position of historical dominance for all the subsequent centuries of the history of the church, up to and including the twentieth century. The controvesy between Augustine and the Pelagians, ... , the efforts in the ecumenical movement to address these problems --- through these historic changes and many others, these "fundamental assumptions which adherents of all the variant systems within the epoch unconsciously presuppose" continued their authoritative hold.　（185）

３．ギリシャの伝統に依拠しつつそれを批判する

Each of the three（or four）Cappadocians stood squarely in the tradition of Classical Greek culture, and each was at the same time intensely critical of that tradition. (9)

４．哲学的伝統への高い評価・継承、キリスト教神学の運命

It was a favorite device of the Cappadocians to recite a catalog of the Greek philosophical schools, (19)

there was probably no writing within the Platonic corpus that stood above Timaeus for sheer importance in Cappadocian thought, and not only because both Basil and Gregory of Nyssa were authers of Christian cosmogonies bearing the title Hexaemeron in which Timaeus and Genesis were played off against each other in continuing dialogue. (20)

The natural theology of the Cappadocians, and of the Greek Christian tradition as a total enity from the Patristic through the Byzantine period, was the product of these encounters with Hellenism (21)

５．哲学者の自然神学と神話的寓意的神学との区別

→ 哲学者の神話批判を異教批判として利用する。伝統への肯定と否定

They also distinguished,...,between the "myths" of Greek religion and literature, ..., and the "natural theologians" among the Greek thinkers. The Christian encounter with Hellenism had to do primarily with these "natural theologians." (24)

On the positive side, this method of apologetics proceeded by attempting to tease out doctrines that were, however indistinctively, implicit in the natural theology of the Greeks.（28）

６．弁証としての自然神学（Natural theology as Apologetics）

対論（問いと答え）が成り立つには、その共通の基盤が必要である。

宇宙論（自然学から形而上学へ）という枠組み。

As apologetics, the natural theology of the Cappadocians was, in the formula of Gregory of Nyssa quoted earlier, a "moral and natural philosophy" (30)

The apologetic method of pointing out parallels but also contrasts between Christianity and Classical culture, and then of tease out the truth in the parallels, suited the doctrinal realm at least as well as it did the ethical. (31)

Gregory enumerated four specific doctrines of Classical philosophy, sound in and of themselves

doctrine of the immortality of the soul / God / creation /
a good and powerful divine providence (32)

７．前提としての自然神学（as Presupposition）・対異端論争（一神教内部での論争）

異端を論駁のための諸前提、何が共有され何が異なっているか。

Just as that modern change of presuppositions was associated at least in part with a transformation in the audience to which theology, especially natural theology, was being addressed, so the continuities as well as the discontinuities between Cappadocian natural Theology as apologetics and Cappadocian natural theology as presupposition were rooted at least in part in the shift of audience brought about by the revolutionary political, ecclesiastical, and cultural events of the fourth century, as these have been discribed in the preceding chapter.

（186）

the Cappadocians' consideration of the Christian case against Greek philosophy had much in common with their presentation of the orthodox case against heresy. That was particularly true of their use of natural theology as presupposition. There ware also, of course, presuppositions in their arguments against heresy, （186）

The difference was that the orthodox drew the correct trinitarian and christological conclusions from this shared Christian presupposition while the heretics did not. （186）

Yet from these same grounds, Gregory insisted in his later *Refutation* against Eunomius, it was possible to argue in such a way as to validate the orthodox doctrine. His first premise seems to have come also from natural theology:.... The second premise came from revealed theology.

divine apatheia and unchangeability （189）

Gregory of Nyssa was also the most explicit about the place of presuppositions in a theological system. （192）

８．異端の体系：誤解された前提・誤った推論

From a mistaken "presupposition" heresy could proceed "by logical consequence" to the conclusion of its false doctrine. （194）

The heretical systems also illustrated that it was possible, while holding to valid presuppositions, to draw false conclusions from them. perhaps because they had been negated or distorted by other invalid presuppositions. The confession of God as Maker was an a priori presupposition on which all of Christian thought,but also the best of Classical thought, could agree.

"The divine nature,..., always remains the same,...," was a valid and universal teaching both of natural theology and of revealed theology. （194）

９．まとめ

(1) キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

・キリスト教の弁証

・キリスト教内の論争：正統と異端

→　コミュニケーション合理性の問いとしての自然神学。

(2) 中世の自然神学→近代へ

二つの書物と知の体系化：宇宙論的文脈での展開。

（２）トマス自然神学の構造

10．神の存在論証における「論証」:

『プロスロギオン』あるいは『神学大全』のコンテクスト。「論証」と信仰との関連性。

存在論的な神の存在論証といわれる『プロスロギオン』（第２，３，４章）には、第１章「神の瞑想へと精神を喚起すること」(Excitatio mentis ad contemplandum deum) という神への祈りが先行。

信仰のラチオについて瞑想は彼の存在論証を論じる前提。

アンセルムスの論証を批判したガウニロも信仰者であった。

↓

『プロスロギオン』の「知解を求める信仰」(fides quaerens intellectum)、あるいはそれに先立つアウグスティヌスの「信仰が尋ね、知性が見いだす」（Fides quaerit, intellectus invenit）という言葉。 → バルト神学に至るまでキリスト教神学の基礎。

自然神学はこの信仰の運動の外に存在しているのではない。

11.「論証」（argumentum, demonstratio）とは何か。

・トマス『神学大全』第一部第二問第三項「神は存在するか」(Utrum Deus sit)。

有名な「五つの道」による宇宙論的な神の存在論証。

・それに先立つ、第一項「神在りということは自明であるか」（Utrum Deum esse sit per se notum）と第二項「神在りということは論証されうるか」(Utrum Deus esse sit demonstrabile)。

そもそも神の存在は論証を必要としているのか、あるいは論証可能なのか。

・第一項：神概念が「在る」を含意するとすれば（アンセルムスの立場）、「神在り」は自明（per se notum）となり、この神概念の解明以外の論証は不要になる。

神在りはそれ自体としては自明であっても、「神が何であるか」を我々人間は知らないのだから我々にとって神在りは自明ではなく、論証を要するということである。

・第二項：神在りという命題が我々によっては論証を要する事柄であるとしても、この論証は人間にとって可能か、可能であるとすればそれはどのようにしてであるのか。

↓

神の存在は信仰の事柄（信仰箇条）であり論証できるものではないという見解に対して。

信仰箇条の内容となる事柄と自然理性によって知られる事柄とを区別し、後者の理性によって知られる事柄は信仰箇条ではなくその前提である。

・「もっとも、これ自体としては論証され知られうることが、その論証を理解するだけの力のない人によって＜信ずべき事柄＞として受け取られることがあっても、それはいっこうかまわない」（Nihil tamen prohibet illud quod secundem se demonstrabile est et scibile, ab aliquo accipi ut credibile, qui demonstrationem non capit）。

神の存在は論証の対象であり、トマスは神の創造行為の結果（創造された世界）から原因としての神を認識するという論証方法（事実による論証）を採用するわけであるが、この信仰箇条の前提である言われた事柄が場合によっては信ずべき事柄として取り扱われてもよい。

12. ＜信ずべき事柄＞（credibile）：厳密な意味における啓示神学の事柄だけでなく、自然理性の事柄も含まれる。つまり、ここに自然理性による活動としての哲学（そして、個別科学も）と啓示によって可能になる神学との接点、すなわち、自然神学の可能性が示されている。

13. 自然神学の議論は、自然理性によって知られる事柄を信ずべき事柄として信仰に接続すると同時に、「神から啓示されうるもの」（divinitus revelabilia）を理性によって到達可能な事柄として自然理性に示すことによって、啓示・信仰と理性との間の双方向の運動が生じるべき思惟の場を構成している、それは信仰と無関係に独立して存立できるものではない。

14.「論証」とは、一定の原理を承認する人々との間ではじめて可能になる。

「聖なる教」(sacra doctrina)としての『神学大全』は、それが学であるとするかぎり、その内容の論証可能性は問題とならざるを得ない（第一部第一問第八項)。

第一問第八項 :『神学大全』自体の論証性の問題　→「五つの道」。

・論証は原理の証明を意味するのではなく、この原理を認める者たちがその原理から導き出されるものをめぐってなされる。

『神学大全』の原理は信仰箇条であり、信仰箇条の論証はトマスの関心事ではない。したがって、「しかしながら、もし彼が原理を全然認めない場合は彼と議論することができない。しかしその場合でも、彼が持ち出す反対の理由を論破することはできるのである」(si autem nihil concedit, non potest cum eo disputare, potest tamen solvere rationes ipusius)。

13．論証の場とその限界。

・無神論者に対して。論証ではなく、敵対者の議論の矛盾を指摘し論破すること。

・異端者（神の啓示によって与えられた事柄の一部分は認める相手）に対して。

・しかし、無神論者にとって、神の存在論証は論証としての有効性を持ち得ない。

「人間理性による論証は信仰に関する事柄を論証するには無力である」（licet argumenta rationis humanae non habeant locum ad probandum quae fidei sunt)、「聖なる教は人間理性をも用いる。しかしそれは理性によって信仰を証明するためではない。……この教が理性を用いるのは、この教のなかで伝えられた何か他の事柄を明瞭にするためである」（Utitur tamen sacra doctrina etiam ratione humana: non quidem ad probandum fidem, quia per hoc tolleretur meritum fidei; sed ad manifestandum aliqua alia quae traduntur in hac doctrina)。

↓

14. 自然神学がもし何らかの説得力を有するとすれば、それは無神論者に対してではなく、異端者に対して。古代から中世、近代に至るまで、実際にはほとんど同じ信仰を共有するか少なくとも神の存在などについて部分的に見解が一致する相手が想定されていた。文字通りの無神論者が問題になるのは、啓蒙思想期以降の自然神学において。

15．自然神学の可能性を論じる際のポイント。

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。議論のコンテクストを構成するその信仰内容から完全に切り離してそれだけで分析されるとき、個々の論証に対して様々な論理的欠陥が指摘されるのは当然である。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同

様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えうるという点であろう。

③しかし､繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。論証と信仰との関係において、信仰から論証への運動はいわば自然に生じるとしても、論証から信仰への移行の方は、自然神学だけでは説明できない複雑な諸要因の存在を念頭に置く必要がある。つまり、信仰は、知的論証（知識・認識）、意志的決断、感情的関与が相互に絡まりあった一つのプロセスとして理解すべきであるように思われる。

（３）コミュニケーション合理性と宗教間対話

16. 意味の地平の非完結性と多元性（意味の断片）
　　歴史の非完結性（終末以前、間の時代）
　　首尾一貫した連関を破る様々な断絶・溝の存在
　　↓
　意味と理解の成立には、「地平融合」とは別の形式での関連性が存在しなければならない。
　諸伝統の相互関係・対話の成立の場
　　意味論と終末論（終末と先取り）

17. これは、啓蒙的理性の理想に対応するものか？　人間の生物学的条件から？
　　↓
　形式性における普遍的前提としての言語
　　言語・意味は、存在論的概念である。
討論・対話の形式的条件としての語用論
　ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

18. 理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先取り＝終末論
　コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論
　　相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的関係
　　理解可能性(Verständlichkeit)
　　真理性(Wahrheit)
　　正当性(Richtigkeit)
　　誠実性(Wahrhaftigkeit)
　↓
現実のコミュニケーションの成立の場：
　「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」
　　つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。
　↓
真理とは何か：真理の合意説

20. Jüegen Habermas, Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie (1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984, S.11-126.

Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.

Wolfgang Pauly, *Die geschitliche Entwicklung religiöser Deutungssysteme. Die Erkenntnistheorie von Jürgen Habermas und ihre theologische Relevanz*, Saarbrücken, 1989.

Martin Jay, *The Dialectical Imagination. A History of the Franhfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973.

Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.

＜参考文献＞

１．芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

２．Ａ・Ｅ・マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。
『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年。

３．Ａ・Ｓ・マクグレイド編『中世の哲学　ケンブリッジ・コンパニオン』
京都大学学術出版会、2012年。

４．Ｅ・グラント『中世における科学の基礎づけ――その宗教的、制度的、知的背景』
知泉書館、2007年。

５．Dieter Henrich, *Der Ontologische Gottesbeweis. Sein Prblem und seine Geschichte in der Neuzeit*, J.C.B.Mohr, 1967.

６．Horst Seidl（Hrsg.）, D*ie Gottesbeweise in der "Summe gegendie Heiden" und der "Summe der Theologie". Text mit Übersetzung, Einleitung und Kommentar. Lateinisch-Deutsch*　（PhB 330）, Felix Meiner Verlag, 1982（1996）.

７．Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon,　1974.

８．John Hick, *An Interpretation of Religion*, Yale Univ. Press, 1989.